

# 来ふらり 18

## “真夏の夢” 図書館

### —こんな図書館があったなら

じりじり照りつける真夏の太陽、木影にゆれるハンモック——。そんな気だるい昼下がり、まどろみの中にあられた、あなたの夢図書館を、ちょっとのぞかせて下さい——。

“図書館むら”を作る!! 豊かな自然の懐に抱かれた、“図書館むら”のようなものを作れないだろうか。

騒々しい都会を離れて、マイペースで好きなだけ図書館とつき合う。誰がどんな風に使ってもいい。条件はただひとつ、「自然と共に生きる」ことだ。遊び疲れた子供たちが、誰かに本を読んでもらってもいいし、いろいろな遊びを教え合うのもいい。一日中、夢中になって研究に打ち込む人もいるだろうし、晴遊雨読の人だっているだろう。疲れた頭で辺りを見渡せば、吸いこまれるような自然が広がっている。

—見、何の変哲もない山小屋が実はコンピューターセンターで、世界中の図書館やデータベースとつながっていたり、あちこちの納屋が国会図書館並みの資料を持っていたりしたら、どんなに面白いだろう。

そんな“むら”をいくつも作る。当然みんな夕日で使える。なんとって日本は文化国家なのだ。  
(政治学科卒 T. I.)

映画図書館 様々な娯楽のうちで、映画ほど簡単に楽しめるものはないと、ものぐさな私は思ってしまう。何せ座ってさえ居れば、目の前の映像が、おいでおいでと手招きして別世界に連れて行ってくれる。現実逃避にはもってこいの代物だ。  
こんな映画の図書館があったら、なかなか面白い

いのではないだろうか。劇場では映画鑑賞、図書館では映画の原作を読む、と言う訳だ。例えばヒッチコックの『裏窓』を見て感動したとする。さてそうなると、もつともつこの作品について、あるいは監督について知りたいという欲求がおきってくる。そんな時、映画図書館の目録カードをくると、たちどころに原作、監督、批評、写真集などの本の所在がわかるのだ。また、この映画図書館は5階建てぐらいのビルで、1階が目録室。本は監督別に並んでいるので、ヒッチコック関係の本は“3階-B区間”といった具合に目録に表示されている。つまり、そのフロアへ行けば、『めまい』だろうが『サイコ』だろうが何でもそろっているのだ。それから……やはり、これは真夏の夢にすぎない。  
(国文学科4年 Y. N.)

リトルロマンス

ほんとの突際

図書館は、より涼しい所であってほしいのです。(inspiré de 映画『ときめきに死す』森田芳光監督作品) ここで言う涼しさとは何もエアコンを完備していただきたい意ではありません。

部屋にじっとしてられない私は時折外出します。外で私のボーツとしてられる場所の1つが図書館なのです(実は同じぐらい、否、よりそうしてられる所が映画館なのですが)。私は図書館でほんやりしている。今や外でほんやり出来る場所は…。(外に出るのが怖いのです)(カフカ)

## “真夏の夢” 図書館

有体に言えば外に点在する図書館（あるいは映画館）は私にとってオアシスです。もちろんりっぱな図書館は必要でしょう。でもそんなことは私にとって二の次で、図書館はふらりと入れてぼんやり出来れば（ちょっとぜいたくを言えば居合わせた人々が涼しい人人ならば）それでいいのです。

こういう不そなる図書館の利用者も居ることを与えられたテーマに甘えて述べさせていただきました。  
(仏文学科卒 H. K.)

## 長屋式図書館 釜ヶ崖の香りがする。『ぴあ』

も『とらば一ゆ』もない。野鳥や野の花の図鑑、絵本、そして木製の長椅子があった。緑色の扉をあけてみる。木藍の葉やベニノキの種の標本、草木染や陶芸の本を目で追いながら進む。赤銅色の重たい扉を押す。誰かがチェンバロを弾いている。

あふれんばかりの楽譜。古楽器の入門書は原書だ。厚みのある音とともに防音扉がひらいた。「文学」と書いた黄ばんだ札がさがっている。少しかび臭いその部屋では、背の高い少年が老人に何かを尋ねていた。どの部屋にもそんな老人が静かに座っていた。自分から口をひらくことはほとんどない。しかし彼らの頭の中には、目録カードがきれいに排列されていた。——扉は、まだまだ続いている。いつのまにか日が暮れていた。

そこは専門書の長屋のようでもあり、出口のないからくり館のようでもあった。終わりがなさそうなのに、少しも不安にならずにすむのはそこだけのような気がした。しかし案の定、終わりはあった。まぶたをひらいた時が、夢の出口だった。

(独文学科卒 A. N.)



鶴巻町のバス停に程近い、大きな交差点の一角のビルの一室に、それはありました。そう、今回ご紹介する都内唯一の漫画専門の図書館「現代マンガ図書館—内記コレクション」です。

“マンガの図書館”ときくと、最近のコミックブームに踊らされた、偏ったマニア的なうさんくささを、感じてしまいませんか。でも実際訪れてみた感想としては、マンガをただ読み捨てるべき情報のようにとらえることは、とても認識不足なことだと知らされた感じです。たかがマンガと言うなかれ！ここまでくるとひとつの哲学、その蔵書の豊富さとそれを上回る熱意には素直に圧倒されます。私自身はそれほどマンガをよく読むという方ではないのですが、現代生活の中に、いかにマンガという文化（あえてそう言います）が浸透しているかを改めて認識した思いでした。

これほど身近にありながら、どんどん消費され消えてゆくマンガの収集・保存にたちあがるべく、



閲覧室にまで山と積まれたマンガ本。

この図書館は誕生しました。蔵書は既に10万冊を超えるそうですが、マンガという生きた文化を保護すべく奮闘のかいあって、日ごとにその数は増える一方とか。目下の悩みは蔵書スペースの不足、資金難と、決して恵まれた状況ではないにもかかわらず「好きだから、お金にはならないけど」(司書の方のことば) 運営しつづけるそうです。

国会図書館にもない貴重本もあるとか。あとはあなたの目で確かめてみませんか。雑然としたビルの一室の中に守られた、この小さなコートピアを。(新宿区早稲田鶴巻町565 ☎03(203)6523 開館時間:12:00~19:00 休館日:火・金曜 入館料:200円)

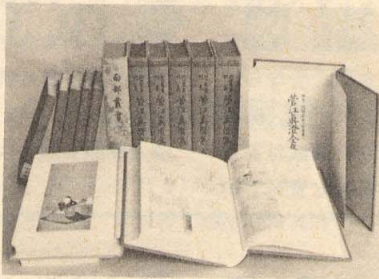
(法律学専攻博士前期課程1年 船木雅子)

平凡社の叢書「東洋文庫」の中に『菅江真澄遊覧記』の現代語訳5巻がある。真澄自筆の絵図も挿入されていて、気の向くままページを繰るうちに時間や場所を超えた世界に吸い込まれて行く。

菅江真澄(本名白井秀雄)は文政12年(1829)秋田の角館で没するまでに約70巻もの旅日記を残した。世に「真澄遊覧記」と呼ばれるものである。天明3年(1783)30歳で故郷の三河を離れてのち、道奥・蝦夷の各地を遍歴し、日本の民俗学に貴重な遺産を残した。

往時の東北・北海道は今日想像もし難い文字通りの辺地であった。真澄は天明期の華やかな中央文化を離れ、辺境の地を黙々と歩き続けた。その日その日の旅が彼の生涯だったのだ。《この紀行の大部分は遊覧記を以て呼ばるべきでは無かった。その特徴は何に存在するかと言えば、第一に世に顕れざる生活の観察である》

## 菅江真澄遊覧記



とは、柳田国男の感懐である。見知らぬ辺境の風土の中で生きたために生き、そして死ぬだけの存在として見過ごされている常民や遊女、旅芸人などの生活を、真澄は深い共感を込めて丹念に記録した。ありふれた日常の一情景が現代の私達に鮮明な現実感を与えるのは、過ぎ行く旅人としての真澄が一期一会

の視線を対象に注いだからにはほかならない。

原本は秋田県の重要文化財となっているが、本館には昭和初期刊行の『秋田叢書』別巻6冊、『南部叢書』中の1冊がある。なお、法経図書室、国文科所蔵の『菅江真澄全集』(全12巻 別巻2 未来社刊)には彼の心

に留まった風景、民俗、民具などの丹念な彩色画が豊富である。彼は黒い頭巾を死ぬまで脱がず「常被り」とも呼ばれ、友人達にも自分の過去を一切語らなかつた。そこに彼の人間的な謎が秘められてもいる。

(運用課長 境経夫)

## どぶさたしました、またよろしく!

★法経図書室から、Utlas導入(前号参照)準備に慌ただしい洋書係に戻りました。かつての経験を支えに、年くつた新人のつもりで出直しです。早く力をつけて快刀乱麻とはいかぬまでも、山なす本を片づける側にまわりたいものです。

夏の終わるころ図書館に最初の端末が入り、洋書係の日常業務に、カナダはトロントとオンラインでのやりとりが加わります。軌道に乗るまでは大小の悲喜劇がくりひろげられることでしょう。ちなみに、生まれて初めて端末に向かう面々6人の平均年齢は一やっぱり秘密にしておきましょう。

(洋書係 熊澤夕輝子)

★1年間、法経図書室に勤務して、また今年の4月から図書館に戻りました。法経図書室は思っていたより、他学部の利用者が多いのに驚きました。出納係ではありませんでしたが、当番で出納に立った時、「〇△の判例」が見たいと請求があつても、探し方がわからず、同僚に助けを求めるときもしばしば。また、「△×指数」の請求には、頭の中の記憶を頼りに雑誌架をうろうろ、とこんな具合でしたが、専門図書室の専門性をちよつぱりかじってきました。1年振りの図書館で、緊張しています。これからもどうぞよろしくお願い致します。

(和書係 橋奥雅子)

フランスで18-19世紀に上演された戯曲を、小冊子として出版した2153点を、仏文科が購入。価格は何と590万円。うち19世紀の作品1147点は、元の所有者によって製本済。なかには、袖珍本や巻末に楽譜をのせたものもある。著者名からの索引も作製済。作品数からも当時の演劇の隆盛がうかがわれる。

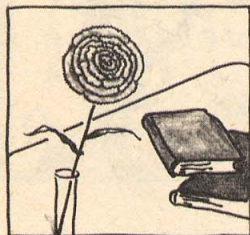
## 参考室あれこれ

輔仁会史学部で昭和40年にだした『高崎藩五万石騒動記』をみたいという問い合わせ。あいにく図書館にはない。同史学部へ問い合わせる。がそういう資料はないという返事。だが、発行者、発行年がはっきりしている。どこかで持っているはずである。まず史料館に電話をする。「その資料はないが、そのころ史学部で活躍していた人を知っている」とのこと。すぐ連絡をとると、ついでがあったからと図書館に来て下さり、「史学部から独立した近代史研究会なら持っているはずですよ」と貴重なアドバイス。同研究会から借りることができた。『高崎藩城付五万石騒動』。地方史を研究する上で貴重な資料です

と感謝される。

「学習院大学の『赤絵』をみたいのですが、1号は何年発行ですか?」1号は昭和25年発行です」とうっかり返事。だが、はるばる筑波からの訪問者は『赤絵』を手にとりうかめ顔。彼がみたかったのは、三島由紀夫が昭和17年に自費出版した同人誌で、1・2号のみで廃刊された『赤絵』だった。本学の『赤絵』は1-7号までは『学習院文芸』8号を記念して『赤絵』と改称した。8号の後書きに「8号には本院の先輩である三島由紀夫氏の詩を頂戴し、掲載した。日頃の御好意と併せて厚くお禮申し上げます。」とある。まぼろしの『赤絵』1・2号、こちらの方は、個人秘蔵を頼る以外は望みはないようである。  
(参考係 甲斐静子)

## カウンターの出会い



4月から運用課に新米として配属された私の過去は複雑で、話せば長い物語となる。というのは少々オーバーだが、学習院に就職したのは青春たけなわのころで、初めての勤務地は四谷、かわいらしい初等科生に「おねえさん、おねえさん」と慕われていたと思っていたのは私だけの思い込みか? 突然、子どもたちとの楽しい生活に終止符が打たれ短大図書館に転勤、7年たって大学図書館整理課へ、これで落ち着くのかと思っていたら4月から運用課へ、というのが私の遍歴である。

慣れない仕事にうろろうしていたある日、院生のOさんがカウンター越しに、「こうしてお会いするのめ久しぶりですね」と言われる。Oさんは初等科出身で、毎日のように図書室に姿をみせてくれた人なのだ。数日後、彼女からカーネーションのプレゼント。母の日も近い5月初めのことだった。

(運用係 上野しのぶ)

## お知らせ

○夏休み中も図書館は利用できます。

7月21日(水)から9月22日(水)までの期間は、次のとおり開館しています。

平日：8:50~16:30

土曜・日曜・祭日：休館(ただし9月5日・12日・19日は12:00まで開館)

○夏休み長期貸出が始まります。

取扱期間：7月7日(水)~9月22日(水)

返納期間：9月26日(土)~10月7日(水)

貸出冊数：学部学生……5冊まで

院生  
論文貸出(4年生) } ……10冊まで

○「論文貸出」の登録受付中

卒論・ゼミ論のテーマが決定している学部4年生は、「論文貸出」の登録をすると、別枠で「3冊・1カ月間」の館外貸出を受けられます。

来ぶらり No.18 1987年7月1日発行

発行責任者：森永毅彦 編集委員：北村 誠 中野里美

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221